中山道間の宿 新加納 まちづくりかわら版

第１８号
平成３０年
１１月１日発行
中山道間の宿新加納
まちづくり会
会長　小島秀俊
各務原市
「まちづくり活動助成金」助成事業

平成三〇年度新加納まちづくり会総会
五月二十六日(土)

新加納まちづくり会総会は、武藤衆議院議員、浅野各務原市長をはじめ、松岡県会議員、伊藤県会議員を来賓に迎え、新加納自治会、シルバー等地域の関係者、会員が参加し盛大に開催された。

第一部では昨年度の事業報告及び今年度の事業計画等の議案について、ご審議いただき承認された。第二部はまちづくり講演として、各務原市教育委員会文化財課長西村勝広氏より「歴史の中の新加納」の講演をいただきました。

浅野市長挨拶

武藤議員挨拶

西村勝広氏の講演

「歴史の中の新加納について」新加納の名前の由来、各務原大地の中の新加納、戦国の新加納、坪内陣屋跡発掘をわかり易く説明いただき、一同、新加納の歴史について理解を深めました。

- 新加納の語源は平安時代
- 東西交通の通過地点
- 軍事的に重要な立地
- 旗本坪内陣屋を中核とする歴史

歴史のまちづくり探訪
信州中山道奈良井宿と福島宿探訪

十月五日（金）初秋の香りがただよる中、会員二十二名が参加して長野県塩尻市の「奈良井宿」と長野県木曽郡の「福島宿」を訪問しました。奈良井宿は多くの旅人で栄えた宿場町で「奈良井千軒」といわれ、今でも張り出した軒先の造りが特徴的な町並がいまでもつづいています。そして、行く手には難所の鳥居峠が待ち構えています。福島宿は大火で消失し、現在では古い建物は残っていませんが地形や道路から往時をしのぶことができました。要所にある山村代官屋敷は中山道の重要関所を統括する旗本山村氏の広大な屋敷跡に建つ資料館で、ガイドの説明を熱心に聞き入りました。参加者は中山道でのご縁をこの二ヶ所で大いに感じることができ、ここを後にしました。

奈良井宿の町並み

山村代官屋敷（資料館）

「新加納善休寺コンサート２０１８」開催しました
8月8日

新加納童謡愛好会の主催により、善休寺の本堂をお借りして歌とバイオリンによるコンサートを行いました。

暑い中８０名程の大人、子供が集まり、心地よい歌声、楽器の響を楽しみました。皆さんは、しばし暑さを忘れ笑顔で最後は合唱しました。

ヴァイオリン	大久保ナオミ
歌	西尾論子
ギター	後藤千秋
歌・ギター	今井俊一
ピアノ	唐井真美
司会	大久保利裕

中山道間の宿新加納について小学校で講演
8月23日

那加一小学校で新加納まちづくり会小島会長による小学校の先生方への「中山道間の宿　新加納について」の講演がありました。那加一は子供達７００名のマンモス小学校です、大勢の先生方が集まり、地元の話に熱心に聞き入っていただきました。本日のその話を伝えて子供達の心にとどめ、年を経過しながら地元を愛する人に育ってくれたらいいな～との先生方への感想でした。熱心な聴講ありがとうございました。

- 道と川の変遷
- 中山道の道筋
- 戦国時代の新加納
- 新加納は天然の要塞
- 新加納村絵図
- 旗本坪内氏
- 新加納歴史地区　等

ホームページ　http://shikano.main.jp
フェースブック　https://www.facebook.com/AinoShinkano/

寺社特集

臨済宗妙心寺派

泰瑞山　法光寺

古い時代の法光寺は浄土宗に属する寺でありましたが、戦国時代に荒廃してしまいました。江戸時代になり貞享三年八月、少林寺三世の屋天景規和尚が少林寺から移住してきて開山、領主の坪内定長（坪内四世）を開基として、臨済宗妙心寺派法光寺が再興されました。現在でも少林寺中興の祖體道宣詮和尚から贈られた「屋天」という直筆の掛軸があります。

江戸時代一時寺勢は衰退しましたが、住職らの努力により幕末には再び立派な寺となりました。しかし、明治二十四年十月に起こった濃尾地震により、寺は半壊の被害を受けてしまいました。

法光寺の門前には、地蔵堂と観音堂があります。文化三年（１８０６）完成の「中山道分間延絵図」にも、門前に「地蔵堂」が書かれています。祠はもちろん後世に立替えられたものですが、地蔵は明和九年（１７７２）の銘があり、蘇原の持田村から新加納に移り住んだ先祖の供養のため、持田村の人々が建立してということです。毎年八月二十四日には地蔵盆が行われています。なお、観音堂には、文化元年五月の銘のある如意輪観音が祀られています。

境内の南側には、自然石でできた歴代の住職の墓所があります。八世住職の舜州宗育和尚（俗名佐藤宗育）は、明治時代初期に自ら師匠となり十～二十人位の子弟に、教えを授けていました。いわゆる寺子屋です。明治五年（１８７２）に学制が発布され学校教育が始まるまで、寺子屋は庶民にとって大切な教育機関でした。明治六年四月、長塚、新加納・岩地・山後・桐野・西市場・前野の７ケ村は、長塚村の大願寺本堂を借受けて借学舎として、「先心舎」という小学校を開設しました。明治七年には、学舎が手狭となり、新加納学校が分立しました。新加納学校は明治十五年に長新学校が設立され統合されるまで、ここ法光寺を教場にして授業を行っていました。佐藤宗育氏も教員の一員として活躍されたということです。

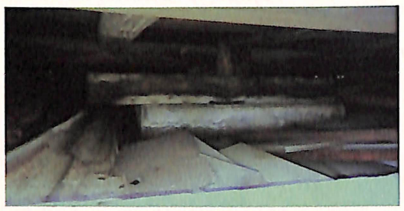
現在の建物の一部に武家屋敷（旗本坪内陣屋）から取り出したと思われる材木が使われています。また、鬼瓦には坪内家の家紋（丸に州浜）が乗っています。

法光寺

山門　観音堂　地蔵堂

鬼瓦家紋（丸に州浜）

寺宝：屋天の掛軸


床下の木材利用

寺宝	○「屋天」掛軸	行事
		・８月２４日　地蔵盆 ・９月第一日曜日　施餓鬼会

新加納の民話

浜見塚

大昔、新加納の北の各務原台地西端のあたりまで海が広がっており、この地が海岸線となっていたことから、浜見と言われるようになったそうじゃ。大垣の赤坂から犬山までは海上を舟に乗って行き来していたが、その間がちょうど七里あったらしく「七里の渡し」と呼ばれておった。

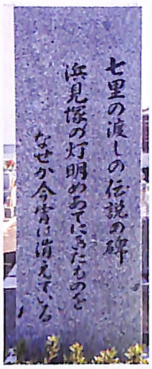
なかの良い男女が犬山に住んでいたが、ある日男が家の都合で赤坂に行ってしまうことになった。そこで、月に一度、ちょうど真ん中へんの浜見塚の灯明をめじるしに合おうという約束をした。

それからは、月に一度男と女はそれぞれ舟をこぎ、浜見塚の灯明の明かりをめざした。二人のなかの良さは、評判だったが、中にはそのなかの良さをうらやましがって、「灯明の明かりを消してやれ」と悪だくみをするものがいた。

そんなことを知らない二人は、いくら舟をこいでも灯明が見えず、不安になった女は「もうあの人はわたしのことをきらいになったんだ」と思いこみ、「灯明めあてに来たものを、なぜにこよいは消えている」ということばを残し、悲しんで海に身を投げて死んでしまったそうじゃ。次の日の朝、浜辺で冷たくなっている女を見つけた男は、どんなに悲しがったことであろう。

今はもうその海もなく、一面に田畑が広がっている。ただ「浜見」という地名だけが、当時の物語を伝えている。

赤坂から浜見は海



浜見町にあるその碑（今尾嘉一氏建立）

（民話シリーズとして平成２４年夏季号の再掲です）